

末黒野

すぐろの

1月号 (通巻845号)



人力車

小川 玉泉

(名譽主宰)

秋の日を車輪に絡め人力車

秋の日を車輪に絡め人力車
島の灯の明るさましぬ雁渡り
椋鳥の騒ぎをよそに富士暮るる
妻の味そのまま吾子の柿のぬた
秋灯下カレー煮詰むる火を細め
冷ゆる書庫父の残せる論語の書

朝から快晴で、汗ばむほどの日差しに恵まれた鎌倉吟行会であった。段葛の桜の若木も根付いて、紅葉の葉もみられた。時折、人力車が若宮大路を通った。手入れの行き届いた一メートルを超え、る車輪に日差しが注ぎ、眩しくきらめいていた。平日ならではの、ゆったりした武士の古都鎌倉の風情を満喫した。

伊勢・志摩・熊野

松本三千夫

金風や遷宮跡の石白き
秋蝶の番へば風の引き離し
山壁のあれば忽ち霧の襞
ひやひやと古道の石の苔濡れて

神の声聞けり古道の霧襖
妙なる音霧立ち込むる那智の滝
那智大社霧曳く千木も鯉木も
秋高し真珠育む湾展け
霧に滲む島の灯数ふ鳥羽の宿
港の灯霧に潤めり露天の湯
崖の苔ほどよく湿り杜鵑草
秋陰や沖の一島ただ遙か

漆の呼吸

黒滝志麻子

(副主宰)

漁火や窓に夜長の星ふやし
菊日和木の橋渡る下駄の音
工房に漆の呼吸夜半の秋
爽やかやバターの走るフライパン
草の花踏みてポニーの柵に入る
満ち潮の波に追はるる赤蜻蛉
小鳥来る虚子一族の眠る山
大仏の伏し目に秋思ありにけり
流鏝馬の果てたる馬場や秋の声
山晴れて里一色に稲の秋
鐘の音の木霊返しや野の錦
鶉鳴いて山河は色を深めけり

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

風の盆

石黒興平

風鎮の紐の色褪せ秋暑し
露天湯の月を崩してしまひけり
知に膨るる子規の頭や榎櫃の実
菊括る外国人の庭師かな
ハイカーの鈴の音霧に溶けゆけり
推敲の成りて夜長の眼鏡置く
谷戸の田の足跡多し稲架まはり
絶え間なき竹の葉擦れの秋思かな
ふる里に似たる谷戸径秋惜しむ
唇と笠の緒の紅風の盆

インタビュ

田中臥石

形代を撫でて流しぬ彼岸花
早昼とすやコンビニの茸飯
インタビュ受けぬ窓透く曼珠沙華
たらちねの黒髪揺する秋の風
生きるてふ一語かまつか燃ゆるかな
蜻蛉や二十の頃の手紙出づ
草の花杉の匂ひの匏屑
河口堰はや鯊釣の二三人
沖円く見ゆ秋鯖釣の防波堤
肌寒や畳ころがる持病薬



秋
燕

森
清
堯

カンナ燃ゆ出入りの多き警察署
蟻螂の見得当千の画構へ
子の返事待つ間の長しつづれさせ
憂さ燃やす種火とならむ曼珠沙華
行合の空や紫苑の競ふ丈
尾根越ゆる光となりて秋燕
瑞垣の内よりとどき鉦叩
海桐の実潮風とどく天主堂
爽やかや丘の孤高の白樺
紺碧の空を引き寄せ烏瓜

霧ぶすま

森
清
信
子

山稜を一気に吞みて霧ぶすま
苔おほふ太き倒木鹿の声
夕暮の迫る山並蕎麦の花
薄紙を解くや無傷の桃匂ふ
久びさに飲兵衛の子と虫の夜
二度ならぬ小雨の宿場桔梗濃き
牛の散る島の草原秋高し
秋天に光を散らし鳥の群
空耳に妣の呼ぶ声萩の径
荘の門堅く閉ざされ毒茸

水澄む

安齋久英

切岸の浪子不動や花芒
島鼻に紺織りたたむ秋の潮
雨脚の募るや秋思殊更に
長き夜を途切れとぎれの夢路かな
衣被口つき出づる真砂女の句
烏瓜吹かるる孤独かみしめて
歩きたや立ちたや鱗雲の下
垣間見る安房の山並秋澄めり
少年に里の風過ぎ赤のまま
紅葉かつ散る禅寺や鬼瓦



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



鳶の笛 今村千年

秋うらら空の高みに鳶の笛
秋天を統ぶるが如し鳶の輪
銅鐸鳴るやこころに映る秋の虹
手を放し駆け出す稚や芋嵐
岨道の腹切やぐら鴉猛くる
谷戸の径並び黄落俄なる
海霧去るや露座の大仏立ち上る

秋初月 吉田きみえ

久闊の友と来し方秋の夜
外湯へと宿下駄鳴らし秋初月
秋うらら母の忌の墓去りがたし
風音に目覚めし夜半や秋の月
境内の奥の深さや水澄めり
バス降りて寺へ半里や刈田道
尼寺に熱き茶賜ふ秋日和

実むらさき 岡田史女

どんぐりや試歩くり返す杖の先
木の実降る大地の鼓動足裏に
階をのぼるリハビリ鉦叩
退院の足や秋日によるめける
口遊ぶ鉄道唱歌花すすき
実むらさき残んの色をこぼしをり
コスモスの風と抜けゆく微恙かな

青炎集

松本三千夫選



ト口箱の百の魚の眼秋澄めり

秋鱈の波に研ぎたる尾びれかな
鱈網潮の重さを引き揚げぬ

鉢底にみみずの村のありにけり
長き夜や夢まぼろしの信長記
渡し舟ちちろの声を残しけり

横浜

太田良一

栗原

千葉恵美子

星月夜独りぐらしの妹思ふ
富める者悩める者に星月夜
鶏頭は百姓の花茎太く

台風の来るらし鶏頭括りけり
星月夜栗駒山の地酒提げ
秋海棠祈りの如く頭垂れ

横浜

加瀬伸子

横浜

北郷和顔

沢音の秋風となる寺の句座
珠洲焼の壺に秋草丈のまま

西行の歌碑に染み入る秋の雨
柏槇の洞に生まれぬ秋の声

読み止しの真砂女の句集十三夜

塞出しの壺に耳あり小鳥来る

山荘の今宵かぎりや吾亦紅
蕊広ぐ終の別れの曼珠沙華
霧晴れて灘の礁の波白し
秋晴を背負ふごとくに歩荷来る

空の色映す池塘や草紅葉
木道の煌めく尾瀬や秋の霜

横浜 吉田美智子

敬老日若さ誇れど共白髪

諸蔓も食してきたる傘寿かな

壺に挿し卓に薄野生れけり

分け入れば更に荒野や溪紅葉

欠席のわけは死亡と暮の秋

天高しゴンドラに聴くカンツォーネ

横浜 正谷民夫

コスモスの風ひと括りふた括り

悲しみをごつと集めて鶏頭花

摩天楼落す灯もなき夜長かな

山頂の祠がしるべ鳥渡る

茅屋根をずぶと濡らして秋の雨

十六畳秋冷ひしと句座囲む

横浜 前川美智子

野火のごと一筋原を曼珠沙華

草蔭の秋蝶の黄よ雨上る

文字薄る墓石供花の濃竜胆

秋霖や小暗き昼の灯を点す

碧天を一刷毛流れ秋の雲

秋冷や瀬音間近き出湯宿

町田 伴 秋草

秋風に繙く平家物語

古き屋を火攻めせんとや曼珠沙華

長雨にカンナ再び咲き誇る

鯖雲の三匹泳ぐ午後三時

子に追はれ飛び立つ鳩や秋日和

境内に秋の蝶舞ふにはたづみ

横浜 小池みな

秋彼岸望郷の香のずんだ餅

秋の川靡きて光るものばかり

群がりて頭上飛びくる小鳥かな

椿の実爆せて残るや殻ばかり

久々の道や玉章まつかつか

寝返りや闇の静寂の秋深く

新宿 稲垣佳子

老松の支柱百本天高し

鬼の子の居心地のよき鬼門かな

句作りの頬杖をつく夜長かな

力ある子規の墨痕秋桜

地藏尊囲む色濃き赤のまま

秋の晴宮居の太鼓よくひびき

耕 土 集

黒滝志麻子選



萩括る括りてもなほ咲き零る

鎌倉 丸山千穂子

休耕田賑はせてをり蕎麦の花

藻屑焚く煙の高く雁渡る

小鳥来る仏足石の過の上

松手入すみたる寺門雲流れ

雲低く外人墓地に蚯蚓鳴く

横浜 志藤 章

払ひきれぬ草の実付くや巡る谷戸

里山の温かき日や青蜜柑

芋を煮て夕餉の香り立ちにけり

大輪の黄菊明るし異人館

街騒の間近に聞ゆ夜の秋

佐藤 喬風

秋鯖のいきなり跳ぬる竿の先

海鼠壁の崩れし蔵や虫時雨

髪切つてもらふ落ち縁女郎花

ふるさとの藁塚傾ぐ地震の跡

緋のカンナ七草ならぬ群なして

渡辺富士子

虫の音を聞き分け過ごす一人酒

魯田に群がる鷺や天真青

耳朶をくすぐる風や菊日和

初紅葉太公望の竿の先

草原の風をじらすや猫じやらし

加藤 タミ

長き夜の本積み上げて読みあぐね

乙女らの腿びちぴちと体育祭

鎌倉の能狂言や秋の夜

柿簾高層ビルによく乾く

竹春の風の城址やホルンの音

松橋 輝子

茸狩何時かは逢へむ小人たち

残り蚊の潜む城址や襲ひ来る

散り散りの子の声釣瓶落しかな

沈着に喪に服す友吾亦紅